東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

大村はま「国語科単元学習」における「観点の設定のカリキュラム」を再検討する

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): Ohmura Hama, Tangen Gakusyu, viewpoint, Max Weber, Idealtypus 作成者: 新妻, 千紘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173394

大村はま「国語科単元学習」における「観点の設定のカリキュラム」を再検討する

――「目的合理的解明」に対する「反証」としての「意図せざる結果」に着目して ――

新　妻　千　紘*

大村はまは，戦後を代表する著名な国語科教師である。大村については，様々な評価及び研究がなされているが，そのなかでも本稿著者が注目しているのが，マックス・ウェーバーが提唱する理解的方法によってなされた研究である。理解的方法とは，研究対象の行為を，その目的と手段の連関によって解明する手法を指している。このような意味の連関の集積を，ウェーバーは「理念型」と呼んでいる。

本稿著者がウェーバーの手法に着目する理由は，大村はまの解明に際して，ウェーバーの手法は非常に相性が良いと考えられるためである。大村の教育行為には合理的特性が認められるため，大村の行為は誰にとっても理解することが容易いと思われる。例えば，大村は，子どもは一人一人異なる能力を持っていると考え，それぞれに異なる課題を与えた。さらに，自分の実績を着実に積み重ねていくために，二度と同じ教材を用いることをしなかった。このような大村の一連の行為は，単純かつ合理的であるが故に，目的と手段の連関を明確に捉えることができる。したがって，明晰判明な「理念型」構築が可能であると推測される。実際，ウェーバーの方法論に基づく研究が，近年発表され始めている。

一方で，大村の行為における意味の連関は捉えやすいという仮説に対する反証が提示されもしている。甲斐伊織による『大村はま国語教室における観点の設定のカリキュラム――単元「一年生からの手紙」への着目から』である。甲斐によれば，子どもの学習経験の総体の中に，学習者が主体となって課題を解決するカリキュラムを見出すことが可能であると言う。もしそうであれば，大村の業績は大村の意図とは関係ないところに成立されていることになり，なおかつ，ウェーバーの方法論が大村を解明するうえで適切であるという仮説も間違っていることになるだろう。

そこで，本稿では，甲斐伊織の論稿が「反証」として成立しうるか否か再度検討を行うことにした。着眼した点は，「観点の設定のカリキュラム」は大村の意図によってなされているのかどうか，そして，大村の教え子たちは実際に主体的に学習する能力を獲得しているのかどうか，である。検討の結果，大村の意図の及ばないカリキュラムの存在を証明することはできなかった。大村が主体的に学習する能力を子どもに身に付けさせることを意図しておらず，そして，子どもたちがそのような能力を獲得している事実も見出されなかった。

Key words

大村はま，単元学習，観点，マックス・ウェーバー，理念型

*東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科